支援学校配属の看護師も、働く、感情ある一人の人間

先の「投稿記事『障害児の親縛る医療ケア体制』を目にして（4/27）」の記事を目にしたメル友から、次のような情報もいただいた。

メル友のその県では、各特別支援学校に非常勤雇用で配置された看護師で間もなく辞めて行く人が多いとか、また、配属された看護師は全員非常勤雇用の学校もあるとか。

こうした事態は何も今に始まったことでなく、全国的に特別支援学校に看護師が配置されだした１０年ほど前にも、若い看護師が辞めていくことが多いことは風の便りに耳にしたことであった。

この側面を、看護師側からの視点からは次のようなことが一つの問題点としてあるように思う。
学校で待機して医療的ケアの時に、教室に呼び出されたり、あるいは、待機する別室に教師が連れてくるだけでは、看護師として専門性の充実感ある日々でなく、当然一人の人間として、また働く者として仕事の継続に迷いが生じるのは、若い人ならなおのこと自然な感情ではないだろうか。

現に、「特別支援学校の看護師募集に応募しようかな」と今年の春先に相談に来た看護師がいたが、やはり、仕事のやり甲斐の側面で迷って、結果的には応募はしなかったよう。
しかも非常勤で子どもが登校中の僅か数時間のために一日が縛られるような勤務条件では、専門職としての仕事のやり甲斐、賃金の経済面からも難しいと思う。

以前に聞いた話しだが、非常勤雇用をアルバイトと割り切って応募してきた年輩の看護師の中には、「小児科勤務の経験がないので自信がないが…」と最初に申し出る人もいるよう。
また、非常勤雇用の看護師には修学旅行の付き添いをさせられない規定のある県もあるとか。

やはり、学校内での看護師としての教育活動への参加の工夫を、また、看護師の研修制度確立を教育界として検討・構築していかないと、看護師を単なる医療的ケアを行うだけの道具のように扱う教育界側の体制では、心ある看護師は応募してこないし、居着かないような気がする。

看護師がいきいきと日々の教育活動に参画する体制の整っている特別支援学校や実践事例を知っている方は、ご紹介ください。

阿部幸泰　　（2010 年 6 月 1 日　記）